コナラ

にほんのよびかた
日本の呼び方

コナラ
小楢

16

ぶんるい

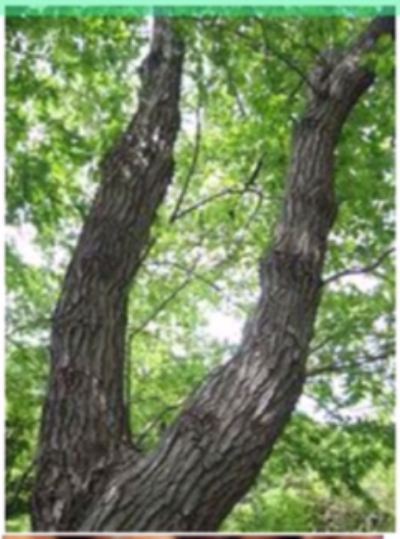
ブナ科

なまえのゆらい

- オオナラという木より小さい葉のナラのいみでコナラとなった

きのとくちょう

- 日本のほとんどのばしょにはえる。
- まえはもやすための木としてつかわれていた。
- 花は4月ごろにさく。
- この木にはどんぐりが身としてつく。どんぐりはあきにじゅくしてぼうしをかぶる。このどんぐりは鳥たちのエサにもなる。



このことがい

木は切ってしまってもすぐに生えてくる
もやすと火が強くなってもいっとき持つのでたきびなどにつかわれている
今ではかていでかんしょう(見る)ための木としてもつかわれている
きった木は家につかう木やしいたけをそだてるための木としても使われている

コナラ

和名	小楢	16
別名	ホウソ、ハハソナラ	

分類				
	科（APG分類）	ブナ科	属	コナラ属
	科（旧分類）		属	
	科（旧分類）		属	

名前の由来

・ミズナラの別名「オオナラ」に対して、小さい葉の楢の意味で「小楢」となった。
・奈良の都の周辺に多い「奈良の木」から
・風が吹くとカサカサと乾いた葉の擦れる音が「鳴る」のが転訛したという説。 諸説ある。

樹木の特徴

・北海道南部から四国、九州に分布する
日当たりの良い山野に、普通にみられる。
かつては薪炭材として、里山の代表樹種でコナラやクヌギなどを10～20年周期で萌芽更新させていた。
・**雌雄同株、雌雄異花**。花期は4～5月、若葉の展開と同時に開花。雄花序は本年枝の下部に多数垂れ下がる。雄花は黄褐色で小さく、1つの花序に多数つく。雌花序は、本年枝の上部の葉腋に出るが、小さくて目立たない。1～2個つく。
・堅果（ドングリ）は秋に熟し、小さな鱗片状の総苞片が瓦状に付いた殻斗(帽子)をかぶる。オナガ、カケス、キジ、ヤマドリの餌となる。
・落葉樹だが、秋に葉が枯れた時点では葉柄の付け根に離層が形成されず葉が落ちず、いつまでも茶色。春に新葉が展開する頃に離層が形成され、落葉が始まる。**枯調性**。

用途・その他

・伐採しても再生が早い。材は火力が強く火持ちが良いことから、かつては民家付近に植栽し薪や炭に利用していた。
・最近では一般家庭の観賞用の庭木、公園樹としても植えられるようになった。
・材は建築材、器具材、土木用材、シイタケの原木としても利用される。

作成年月日　2021，09，03